様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　５月１３日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２７２０１３３
研究課題名（和文）
グレバン作『受難の聖史劇』諸写本の研究－作品伝承と詩作技巧－
研究課題名（英文）
Study of the manuscripts of Arnoul Gréban’s *Mystère de la Passion*：transmission and versification
研究代表者
黒岩　卓（KUROIWA　TAKU）
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：70569904

研究成果の概要（和文）：
アルヌール・グレバン作『受難の聖史劇』の諸写本のうち、特に上演に用いられた H 写本のテクストの転写及び写本学的調査を行ない、他の写本に対する本文の異同や写本に含まれた上演指示を記述し、写本の成立過程について考察を行なった。他方で『受難の聖史劇』のモデルであるウスタッシュ・メルカデ作『アラス受難劇』との比較検討、さらに当時の様々な劇テクストを例にとった作品伝承と韻文構造との関係に関する研究を行なった。

研究成果の概要（英文）：
For this project, I studied the manuscript H of Arnoul Gréban’s *Mystère de la Passion*, which was used for a dramatic performance. Through its transcription and a codicological study, I described textual variants and special stage directions contained in this manuscript and reflected on the process of its fabrication. In addition to this main study, I compared this play with Eustache Mercadé’s *Passion d’Arras* and I also did research on the relationship between the textual transmission and the versification for some other plays of the Later Middle Ages.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
２０１２年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：ヨーロッパ文学（英文学を除く）
キーワード：仏文学・文献学・演劇学・詩作技巧・写本学

１．研究開始当初の背景

今日まで報告者が十五・十六世紀劇テクストの研究を進める上でしばしば疑問になったのが、劇テクストにあらわれる「不規則」詩行を評価する上での従来の基準の曖昧さである。フランスの伝統的な中世文献学では、基準となる一写本を選び、できるだけその写本の状態を尊重する方向で校訂を行う。だがこと詩作技巧の問題となると、写本や印刷本に保存されたテクストに問題があった場合

に、それらを写字生や印刷業者の「怠慢」に帰する場合が多い。報告者はこれまでの研究から、劇上演の実際に近い場で作成されたと考えられる写本のテクストにこそ、「不規則」であったり詩形の定義上困難を伴う箇所が多く存在すること、また逆に、読書用書籍としての体裁を備えた写本や印刷本のテクストではこうした詩行が減少することを確認していた。その結果、詩形定義上の困難を伴う詩行の存在が、当時の上演・制作上の何らかの必要に対応している可能性があると考えるにいたったのである。これらの仮説を検証するための準備として、従来はあまり顧みられることのなかった、実際に上演時に用いられたと考えられるタイプの写本に収録されたテクストを研究対象とするという報告者の展望が生まれた。

２．研究の目的

アルヌール・グレバン作『受難の聖史劇』の研究、とくに諸写本に保存されたテクストの分析を通じて、演劇上演が読書用書籍へと変容する過程においてテクストがいかなる変貌を遂げるかを明らかにすることを主な目的とした。また上演用の写本から実際に上演がつくりあげられる際に生じえた即興などの可能性も探求することで、文献学的視点からの演劇研究と芸術学的視点からの演劇研究の橋渡しを行うことを試みる。その一方で、演劇史・文学史でよく言及されながら、日本ではその実態が知られていないアルヌール・グレバン作『受難の聖史劇』の日本における紹介を行なう。

３．研究の方法

『受難の聖史劇』諸写本のなかでもとくに「オリジナル」（ある特定の上演の基になったテクストを収録するタイプの写本）に属すると考えられる H 写本を取り上げ、その転写および写本学的検討を行なう。それを通じ、実際の上演に用いられたテクストにおける詩作技巧やテクストにおいて、他の読書用写本などに収録されたテクストと比較してどのような特徴がみられるかを検証する。具体的には、複写を利用してのテクスト転写、転写上の確認及び写本調査のためのフィールドワーク、そして他の研究者との情報交換という三要素が本課題の基礎的な方法を形作る。この三種の作業の遂行には、これまでに培ってきたヨーロッパ諸研究者との情報網や、ヨーロッパ各地の図書館とのコンタクトが活用される。他方で同作品の研究をより深化させるべく、その成立過程の検証、とくに作者が参照した可能性が極めて高い『アラス受難劇』との比較を行う。また同時代の他のテクストについて、作品伝承に関する考察などを適時行なう。

４．研究成果

（１）最終年度までに、アルヌール・グレバン作『受難の聖史劇』H 写本全体のテクストの転写と写本学的調査を行なった。テクストの転写については、本文の確認にまつわる様々な問題からその公表についてはより慎重な作業が必要とされることが明らかになった。また将来的に同作品の校訂を目指す場合、「オリジナル」に属する写本の他の有力な候補として、ル・マン市立図書館所蔵の G 写本が考えうることが分かった。これら H 写本のテクストの異同および写本学的調査の結果は、最終年度中に開催された国際シンポジウムにて日仏両言語で報告され（学会発表②）、論文として執筆されている（著書②）。その中にはテクストの顕著な異同のまとめや折丁の調査結果なども含まれている。この調査報告の概要は以下の通りである。

①H 写本は「オリジナル」とされる上演の基盤となる写本であり、テクストはもちろん、それ以外の上演にまつわるさまざまな情報を不十分ではあるもののそこから読みとることができる。だが従来考えられてきた同写本に纏わるイメージとは異なり、そうした情報の分布には写本の部分によって相当なばらつきがあり（すなわち、上演に関する情報は前半に集中しており、後半には殆どみられなくなる）、同写本がいまだ製作途上にある可能性も捨てきれないことが明らかになった。

②テクストそのものには他の写本に対してさまざまな異同があり、省略・挿入が見出せる。H 写本固有の詩行の省略・挿入については、それらが読解上の問題を引き起こすことは少なく、問題が起こるとすればそれはとくに写本の最終部に集中している。またそれら省略に伴って詩形上の整合性に問題が生じるのも写本の最終部に集中している。この現象をどのように位置づけるかは①で明らかになった写本の製作過程の問題とも合わせて考えられなければならず、今後より深めていくべき課題である。

③明確に書かれておらず、また当時の慣習的韻文形式にも統合されないテクストが上演において挿入された可能性を示唆する記号が、同写本において存在することが明らかになった。これらの記号は今後「オリジナル」に属する写本を調査して行く上での有益な手懸りとなるだろう。

（２）『受難の聖史劇』の制作過程を検証すべく、グレバンが『受難の聖史劇』執筆の過程で参照した可能性が極めて高いウスタッシュ・メルカデ作『アラス受難劇』とこの作品を比較した。作品の全体的構成に関するものが一点、さらに作品内部の神学的展望の変化とそれに伴う登場人物の描写の変化に関するものが一点である。以下がそれぞれの研究の概要である。

①　『アラス受難劇』およびグレバンの『受難の聖史劇』において、「日」という作品区分は「イエスの誕生から幼年時代」および「イエスの青年期から受難」という二部構成の下位区分として機能している。「第一部」に「第一日目」、「第二部」にその約三倍の長さの「第二～四日目」が割り当てられているが、このことは「第一日目」が「第二部」を形作っている他の三日間全体に匹敵しうる重要性と独立性を有していたことを示唆する。グレバンは『アラス受難劇』を全体の区分・内容・詩作技巧など様々な点で継承しつつ、エピソード及び詩形の配列に関する配慮を徹底させることで、「第一部＝第一日目」で語られるべき内容、すなわちイエス・キリストの誕生というテーマを、先行作品である『アラス受難劇』より明確に打ち出した（著書③）。

②　原罪の責任者であるアダムがキリストによって辺獄から解放されること自体は他の受難劇でも示されていた。しかしグレバンは『アラス受難劇』の枠組みを継承しつつ、作品世界を「正義」の神から「慈悲」の神につかさどられるものへの根本的に変化させ、原罪後のアダムの苦悩を物語の推進力とする。韻文技巧の点ではアダムに関する言説の多面性を強調しつつ、人物造形それ自体においては偉大な祖父としての姿を際立たせるように工夫をこらした（学会発表①および著書①）。

（３）その他の作品を例にとり、とくにテクスト伝承と詩作技巧の関係に関する考察を深めた。以下がそれぞれの研究の概要である。

①以前より共同作業を行っている二名（D・スミス及びX・ルルー両氏）のフランス人研究者とともに、イタリアのスーザにてアルプス周辺で書かれた聖史劇作品（『聖アンドレの受難劇』）における詩作技巧の構造に関する研究発表を行った。フランコ・プロヴァンサル語による聖史劇『聖アンドレの劇』の韻文構成にみられる様々な詩形群（*abab*、*ababab* や *aaabaaab* など）を、韻の配列 *ab* からなる二対の詩行の繰り返しおよび変形としてとらえることで、作品にみられる詩形群に共通する構築原理を明らかにした（学会発表④）。

②『受難の聖史劇』と同じ主題を扱った中世演劇作品の中で位置づけるべく、サント・ジュヌヴィエーヴ図書館蔵写本１１３１に収録された『我らが主の受難の聖史劇』の写本・詩作技巧の調査を行い、その内容を発表・論文として執筆した。なかでも、詩作技巧の不規則性を考える上で格好の材料となる、孤立詩行の成立過程とその解釈法に関して研究を行った（学会発表③および雑誌論文②）。

③同時代の代表的笑劇『ピエール・パトラン先生』のテクスト伝承において「不規則」とされる詩行が現われる過程を、特にその収録テクストの状態が劣悪とされる印刷本を取り上げて検討し、印刷業者の「不注意」などによる詩行の欠落そのものは、しばしば考えられがちなよりも起こりがたいことを明らかにした（雑誌論文①）。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
① Taku KUROIWA, « Notes sur l'apparition des vers isolés dans les imprimés des textes dramatiques médiévaux : le cas de la deuxième édition Trepperel de *Maistre Pierre Pathelin* », *Cahiers électroniques d'histoire textuelle du LAMOP (CEHTL)*, 査読無, 4, 2012, pp. 41-63.

② 黒岩卓,「『我らが主の受難の聖史劇』(サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館所蔵写本 1131 収録）の孤立詩行の評価について」,『Nord Est（日本フランス語フランス文学会東北支部会報)』, 査読有, 4, 2011, pp. 21-34.

〔学会発表〕（計４件）
① 黒岩卓,「アルヌール・グレバン作『受難の聖史劇』におけるアダムの描写について」(La representation d'Adamdans le Mystere de la Passion d'Arnoul Greban), 国際シンポジウム「文学における〈喪〉，そして共同体の再構築」，2012 年 12 月 22 日，岩手大学.

② 黒岩卓,「中世演劇テクストの写本とその使用—アルヌール・グレバン作『受難の聖史劇』H 写本 （Paris, BnF, fr.1550）の例—」

(Les manuscrits des textes dramatiques medievaux et leurs utilisations：le cas du manuscrit H du Mystere de la Passion d'Arnoul Greban (Paris, BnF, fr. 1550)), 日仏共同国際シンポジウム「演劇と演劇性」, 2012 年 10 月 30 日, 早稲田大学(招待発表).

③　黒岩卓,「中世演劇の韻文構築原理を巡る諸問題：サント・ジュヌヴィエーヴ図書館所蔵写本 1131 に収録された諸作品を例に」, 日本フランス語フランス文学会東北支部大会, 2010 年 11 月 13 日, 秋田大学.

④　Taku KUROIWA, Xavier LEROUX, Darwin SMITH, « Ipotesi sulla funzione del testo drammatico fra scrittura e oralità ： il problema dei versi detti « irregolari » nei testi drammatici occitani », Teatro religioso et communità alpine, 2010 年 10 月 15 日, スーザ（イタリア）（招待発表）.

〔図書〕（計３件）
①　中里まき子, 他（含黒岩卓),『喪失の文学　再生の文学』, 岩手大学人文学部, 2013, 掲載確定.

②　竹本幹生, 他（含黒岩卓),『日仏共同国際シンポジウム—演劇と演劇性—』, 早稲田大学演劇博物館　演劇映像学連携研究拠点, 2013, 掲載確定.

③　甚野尚志, 益田朋幸, 他（含黒岩卓),『ヨーロッパ中世の時間意識』, 知泉書館, 2012, pp.163-178.

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
黒岩　卓（KUROIWA　TAKU）
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：70569904

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：